当院におけるバルプロ酸ナトリウムの使用状況について

第10回北海道病院学会
平成22年7月10日

五稜会病院
河村 論、中島里美、曽山桃子

はじめに

バルプロ酸ナトリウムは、精神科領域において気分安定薬として、主に気分障害を背景とした易怒性や攻撃性、衝動性などを治療する目的で使用されている。

●気分障害について
厚生労働省の患者調査によると平成8～17年の9年間で気分障害の患者数が約3倍になっている。

バルプロ酸ナトリウムの処方機会が増加している可能性があり、現状調査を行い検討した。

気分障害…双極性感情障害、うつ病、持続性気分障害など

バルプロ酸ナトリウム

●作用機序
・GABA系賦活、グルタミン酸系抑制、Na^+、$Ca2^+$channel抑制
・最近、神経栄養因子（BDNF）や神経保護因子（Bcl-2）などを賦活化することも報告されている

●適応
・各種てんかん（小発作・焦点発作・精神運動発作ならびに混合発作）およびてんかんに伴う性格行動障害（不機嫌・易怒性等）の治療
・躁病および躁うつ病の躁状態の治療

当院における使用状況

●対象
2009年に入院し、2010年3月までに退院した531例のうちバルプロ酸を服用していた163例を対象に調査した。

●バルプロ酸服用群
163例（男:女=46:117）
＜年齢＞男性 34.4±11.5歳　女性 32.0±12.2歳

新規群	増量群	減量群	一定量群	中止群
50	18	7	77	11

診断名

●ICD-10による診断名
F31　双極性感情障害（N=28）
F32　うつ病（N=26）
F33　反復性うつ病性障害（N=21）
F92　行為および情緒の混合性障害（N=14）
F20　統合失調症（N=13）
F60　パーソナリティ障害（N=13）
F84　広汎性発達障害（N=8）

その他の不安障害（N= 7）、統合失調感情障害（N= 6）、持続性気分障害（N= 5）、摂食障害（N= 4）、適応障害（N= 2）、解離性障害（N= 2）など

併用薬

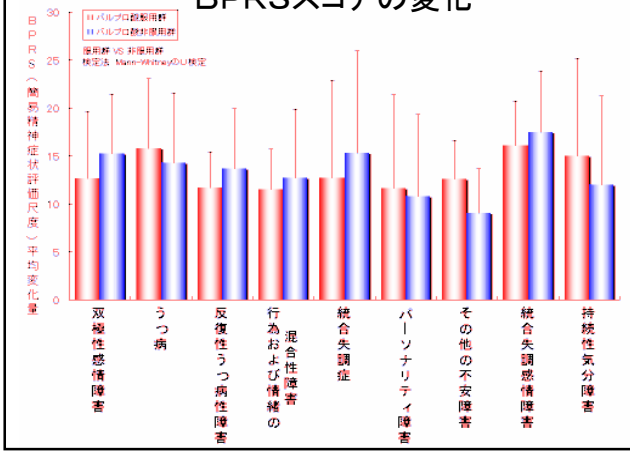
併用薬	症例数	併用率
主な治療薬がバルプロ酸のみ	21	－
抗不安薬を併用	90	59.2%
抗精神病薬を併用	60	39.5%
抗うつ薬を併用	49	32.2%
気分安定薬を併用	30	19.7%
【併用薬】炭酸リチウム	20	（75.0%）
クロナゼパム	8	（20.0%）
カルバマゼピン	2	（5.0%）

平均投与量・血中濃度

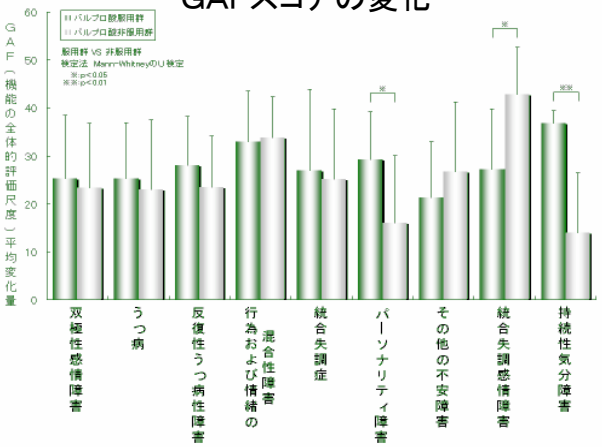
診断名	投与量(mg)	血中濃度(μg/ml)
双極性感情障害(N=28)	590.7±245.6	45.5±20.1 (N=14)
うつ病(N=26)	407.7±183.1	49.4±17.1 (N=10)
反復性うつ病性障害(N=21)	466.7±237.3	30.5±10.7 (N=12)
行為および情緒の混合性障害(N=14)	335.7±182.3	43.1±27.6 (N=7)
統合失調症(N=13)	423.1±183.3	50.3±21.2 (N=6)
パーソナリティ障害(N=13)	430.8±179.9	41.4±11.9 (N=6)
広汎性発達障害(N=8)	336.4±290.8	56.1±27.0 (N=3)
その他の不安障害(N=7)	542.9±250.7	33.6±16.1 (N=4)
統合失調感情障害(N=6)	533.3±242.2	98.4±29.3 (N=2)
持続性気分障害(N=5)	400.0±141.4	26.1(N=1)
⋮		
全平均	456.2±218.2	44.0±21.7 (N=71)

Mean±SD

BPRSスコアの変化



GAFスコアの変化



まとめ

- バルプロ酸ナトリウムは様々な精神疾患に処方されており、2009年入院患者の30.7%に使用されていた。
- 平均投与量は456.2mgで、一般にてんかんで使用される用量よりも少なかった。
- 平均血中濃度は44.0μg/mlで、一般に有効とされる治療域40～120μg/mlには含まれていた。
- 効果については、GAFスコアにおいてパーソナリティ障害、持続性気分障害は非服用群よりも改善する傾向がみられた。これらの疾患に効果があったことは、気分障害の要素も入っていることが想定され、バルプロ酸が広く気分障害に効果があることが示唆された。

参考文献
寺尾 岳:バルプロ酸の臨床応用. Bipolar Disorder2:90-107,2004
岡本泰昌,山脇成人,鈴木克治・他:双極性障害に対するバルプロ酸の有効性および用法・用量に関する検討(2005)